

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：37103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26330414

研究課題名(和文)民謡学習のためのコアカリキュラム開発とそのデジタルコンテンツ制作

研究課題名(英文)A study of core curriculum development and digital teaching material production for Japanese folk song learning

研究代表者

城 佳世 (Jo, Kayo)

九州女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号：40722731

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、全国の教員養成系の学生へのアンケート調査を通して、日本民謡の認知度、地域性の有無を明らかにした。また、小中学校教師へのアンケート調査と面接調査を通して、現在の日本民謡学習の問題点を明らかにした。さらに、その整理・分析をふまえて、日本国内における民謡について伝播と変容という視点から、民謡学習のためのコアカリキュラムを検討した。その上で、そのカリキュラムをもとにして「学習者」「教師」「地域の民謡関係者」との協働でデジタル教材を開発した。

研究成果の概要(英文)：In this research, we conducted a questionnaire survey of students in teacher training programs across the country to assess the awareness of Japanese folk songs and the presence or absence of regional characteristics. In addition, through questionnaire and interview surveys of elementary and junior high school teachers, we clarified problems current to Japanese folk song learning. Furthermore, based on sorting and analysis, we examined the core curriculum for folk song learning from the perspective of transformation and dissemination of folk songs in Japan. Based on this core curriculum, we developed digital teaching materials in collaboration with "learners", "teachers" and "regional folk song advisors".

研究分野：音楽科教育

キーワード：日本民謡学習 デジタル教材 ICT活用

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進む現在、日本の伝統的な文化の学習の充実が求められている。本研究は、そのひとつである日本民謡に着目した。

日本民謡は従来、人々の娯楽であり、特に明治、大正、昭和 50 年代初頭までは、多くの人々に愛好されその認知度も高い音楽ジャンルであった。しかし、現在、生活の中の娯楽として民謡がうたわれる機会は減少し、マスコミを通して流れてくる民謡も数少ない。また、それぞれの土地で生活の中でうたわれた民謡も、地域コミュニティの崩壊などの理由により衰退の危機に瀕している。このように、現在では、学校教育以外の場で民謡を認知する機会は少なくなっており、かつての時代とは大きく状況が異なっている。

第 7 次学習指導要領では日本民謡は郷土の伝統音楽のひとつとして取り扱われている。民謡を郷土の音楽としてとりあげるには、その民謡が生まれた背景、また伝播や変容を理解させることが重要である。しかし、日本民謡学習は日本の伝統音楽の研究の一部として、断片的に調査や指導方法等に関しておこなわれているのみである。現在の日本民謡の認知度、学校における民謡学習の実態、問題点、課題も明らかにされておらず、これらを基礎資料とするコアカリキュラムも開発されていない。

そこで、若者を対象とした日本民謡の認知度の調査、日本民謡学習の実態調査をおこない、これらを基礎資料とするコアカリキュラムの開発、及び現場で活用することのできるデジタルコンテンツの制作を考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的のひとつは現代の若者の日本民謡の認知度、学校教育における日本民謡学習の実態を明らかにすることである。

日本を 7 ブロック (北海道、東北、関東、中部、関西、中国・四国、九州) にわけ、教員養成系に所属する学生を対象に民謡に対する認知度の調査をおこない、学生の民謡に対する認知に地域性が関連するか否か、を調査することである。また、小中学校音楽教師を対象に、音楽科における民謡学習の問題点 (時間数、指導方法、学習者の興味等) をアンケートと面接調査を通して日本民謡学習の実態を調査する。これらの調査結果を分析することを通してコアカリキュラムの基礎資料を作成する。

本研究の目的のふたつは、実態調査の基礎資料をもとに、「伝播と変容」をキーとした民謡学習のためのコアカリキュラムを開発する。日本民謡は総曲数は約 58,000 曲あると考えられ、それぞれの楽曲が地域の労働特性 (農業、林業、漁業等) 神事などの地域の文化特性と関連している。そのため、どの民謡を学習対象にするにしても、それら地域の特性や文化という脈絡のなかで楽曲を教

材化しなければ、単なる「鳴り響く音」としての学習としてしか成立しない。民謡は、それぞれの地域でそれぞれの地域文化とともに個々に変容している。そこで、この「伝播と変容」に視点を置くことにより、個別の地域の民謡が日本の中でどのように位置づけるのかという理解が可能になり、自己の地域の民謡の成立が理解できるようになる。そうして、地域の民謡だけでなく、日本に現存する民謡を体系的にとらえることのできる授業を構築できるようにする。

本研究の三つはコアカリキュラムをもとに小中学校の教員及び地元の民謡関係者の協力のもと、デジタル教材を制作することである。デジタル教材は、コンテンツの入れ替えが可能なシステムを採用し、今後、コンテンツを入れ替えることによって、地域の異なる楽曲をデジタル教材として用いるよう設計する。

本研究で提示する「民謡学習の実態調査」は民謡学習に関する基礎データとして今後の民謡学習の大きく寄与し、また「伝播性」に着眼したコアカリキュラムの開発は、教育基本法で示す「日本の文化」についての理解を一歩進めるものであり、コアカリキュラムにもとづいたコンテンツ作成とデジタル教材の開発は、これまで音楽科教育でみられたデジタル教材とは異なり、デジタルならではの多層性やリンク性といった特性をいかした教材となる。

3. 研究の方法

平成 26 年度は、研究代表者及び協力者によって北海道、東北、関東、中部、関西、中国・四国、九州の 7 ブロックをそれぞれ担当し、の教員養成系の学生を対象に民謡に対する認知度をアンケート調査する。民謡に対する認知については、教科書に掲載されている曲目と各ブロックの地域の民謡に対する学生の認知、すなわち民謡の認知に地域性があるかについても調査する。音楽科教員を対象にして、民謡学習の問題点 (時間数、指導方法、学習者の興味等) をアンケートと面接調査 (授業参与や音楽教師に対するヒアリングを含む) を通して日本民謡学習の実態を把握する

平成 27 年度は、平成 26 年度の得たデータをもとに、民謡学習の問題点に関するシンポジウムと検討会を実施する。またそれらのデータをもとに、民謡学習に関するコアカリキュラムを検討する。コアカリキュラムの開発にあたっては、民謡の伝播と変容に視点をおき、民謡の背景にある地域特性と文化特性に加えて、民謡の伝播と変容を中核に据えるコアカリキュラムを作成する。

平成 28 年度には、これをもとに、ソフトウェア「フラッシュ」で作動するデジタル教材、及びそれぞれの地域教材に入れ替え可能な PPT 教材を作成する。

4. 研究成果

(1)若者の日本民謡に関する認知度調査

北海道、東北（宮城県） 関東（茨城県） 中部（愛知県） 関西（兵庫県） 中国（島根県） 四国（高知県） 九州（福岡県） 沖縄（沖縄県）の9大学において、教員養成系に属する780名の学生に対し、質問項目及び楽曲を録音した音源をもちいて、リスニング方式による調査を実施した。その結果、それぞれの曲について「まったく知らない」と回答したのはソーラン節 3%、斎太郎節 81%、八木節 72%、こきりこ節 69%、安来節 89%、金毘羅船々 47%、黒田節 75%、

ていんさぐぬ花 55%、であった。これらの結果から教科書で取り扱われている曲の認知度が必ずしも高いとはいえず、ソーラン節以外の曲の認知度は高くないことが明らかになった。調査対象であった学生が使用していた教科書ではこきりこ節が、歌唱、器楽教材として、八木節が器楽教材として掲載されていたが、その認知度は決して高くない。特にこきりこ節については認知の場を「大学」と回答した学生も多かった。

金比羅船々及び安来節は、教科書に表現教材として楽譜の掲載がされたことのない曲であるが、教科書に楽譜が掲載されている曲の認知度と大きな差はみられなかった。一方、調査を実施した学生の使用教科書では、ソーラン節は、一社のみ掲載であるにもかかわらず、その認知は97%と非常に高かった。その理由としては、小学校や中学校における運動会のリズムダンスがあげられていた。

このように現在の大学生は日本民謡をあまり認知しておらず、音楽科教育でおこなわれている日本民謡学習も学生の認知度にはあまり影響を与えていないことが明らかになった。

(2)地域性に関する調査結果

黒田節 斎太郎節 ソーラン節 ていんさぐぬ花 安来節 は伝承がおこなわれているとされる都道府県で調査を実施した。斎太郎節は宮城県、安来節は島根県内の大学で調査をおこなったが、「曲を知っていて一部が歌える」が全国と比較すると多かった。また、「全く知らない」との回答は少なかった。曲を認知した場についても「学校の音楽の授業」「学校の音楽以外の授業」に加えて、「地域や家庭」や「メディア」が比較的高い割合であった。ソーラン節は、全国と北海道の認知度の割合に差はないが、北海道では認知の場として「家庭や地域」「メディア」の割合が高かった。また、ていんさぐぬ花は、沖縄県出身の学生では100%が認知しており、認知の場を「学校」と回答した学生よりも、「家庭や地域」と回答した学生の割合が高かった。これらの結果から、同じ都道府県での民謡の認知は、「地域や家庭」「メディア」の影響によって地域

性が生まれていることが明らかになった。また、こきりこ節 金比羅船々 八木節は、この曲が伝承されている県とは、異なった県で調査をおこなった。その結果、地域性はほとんどみられなかった。

一方、同じ県内での調査にもかかわらず、認知度があまり高くない曲もあった。黒田節である。黒田節は江戸時代、黒田氏が治めていた福岡藩（現福岡市）に伝わる民謡である。しかし、今回調査をおこなった大学は小倉藩（現北九州市）であったことから、認知度が低くなったと考えられる。このように、郷土の民謡は地域によって、伝承される範囲が異なっており、一概に都道府県単位で規定することはできないことが明らかになった。したがって、教科書に掲載されている都道府県の民謡の曲目も実際には「郷土の音楽」と一致していないケースもあると考えられる。

(3)民謡学習の実態調査

全国の小中学校 1000校を無作為抽出し、音楽科を担当する教員を対象として質問紙による実態調査をおこなった。その結果、日本民謡の授業を「実施した」と回答したのは小学校で73%、中学校で42%であった。なお、実施していないと回答した学校についても「必要性を感じない」との回答はみられなかったことから、すべての学校が日本民謡の学習の必要性を感じていることが明らかになった。

同調査の回答数は350校であったが、そのうちの96校は学習した曲目として民謡以外を回答していたことから集計から除外した。除外した中で最も多かったのは祭りの「お囃子」を民謡ととらえているものであったが、その他にもさくらさくら 越天楽今様 春の海 トラジ打令 われは海の子 荒城の月などがあげられていた。このことから、教員の民謡に関する知識が不十分であることが明らかになった。教材としてとりあげられた曲目は、ソーラン節が小学校で72%、中学校で55%と最も多かった。日本民謡学習に関して教師の悩みや課題について、回答が多いのは「指導法がわからない」で、49%であった。その他には「種類や特徴を知らない」「音楽的特徴がわからない」などの回答が多かった。また、記述では「自分自身が西洋音楽しかやってないのでわからない」「自分がやってないもの、うたえないものは教えることができない」「技術指導ができない」などもみられた。一方、「児童・生徒が興味を示さない」は22%であった。これらの結果から、教員は日本民謡学習の必要性を感じているものの、その指導に不安を抱いて授業をおこなっていることが明らかになった。なお、「郷土の民謡」について学習をおこなっていたのは14%であった。

また、今後期待される方策で多かったのは小中学校ともに「デジタル教材の開発」で

あった。

(4) コアカリキュラムの作成

(1)(2)の調査の結果、現在、学校でおこなわれている日本民謡の学習は子どもたちに定着しておらず、自身の文化としてとらえさせることが十分にできていないことが明らかになった。また、(3)の調査の結果、教員の知識や理解が不十分であり、音源や映像をコンテンツとするデジタル教材の重要性が認められた。そこで、変容をキーワードに、子どもたちに民謡を自身の文化としてとらえさせることができるとする自分のものとしてとらえさせることができる日本民謡のコアカリキュラムを開発した。

なお、小学校では歌詞の変容を中心としたコアカリキュラムを、中学校では囃子詞、リズム、歌い方をキーワードとする知識構成型のジグソー法による協調学習によるコアカリキュラムの作成をおこなった。

図1 コアカリキュラムの一部

学習活動	指導上の留意点
1 本時のめあてをつかむ。 (1) 〈ソーラン節〉と〈南中ソーラン節〉を比較聴取する。 (2) いろいろな歌詞のA節を聴く。 ・○○○○○～ ・△△△△△～ ・□□□□□～ A節 M小バージョンをつくらう	※民謡が変容して現在に受け継がれていることを知らせる。 ※デジタル教材を活用することで、どれもA節であることを確認させる。 ※民謡を変容させて、自分たちの炭坑節をつくることを知る。
2 A節 M小バージョンを考える (1) 今の小学校らしさをだすためのキーワードを発表する。 ・○○○～ ・△△△～ ・□□□～ (2) 旋律にあわせて、歌詞を考え、ワークシートに記入する	※教師が手本をみせることで、創作のイメージを持たせる。 ※児童のキーワードを用いて、即興的にやってみせることで、歌詞づくりのイメージを持たせる。 ※フレーズごとに、ワークシートに記入させ、歌いながら考えさせる。
3 つくったうたをグループで発表する。	※それぞれのグループのよさを感じ取らせる。
4 本時のまとめをする (1) 現代風にアレンジされたA節を聴く。	※さまざまなアレンジのA節も、民謡であることを理解させる。 ※今回つくった炭坑節も、A節のひとつであることを確認させ、自身も文化の担い手であることに気づかせる。

(5) デジタル教材の制作

「伝播と変容」をキーワードとするフラッシュ教材

(3)の調査の結果、今後期待される方策で多かったのは小中学校ともに「デジタル教材の開発」であった。次に多かったのが小学校ではGTの活用、中学校では「研修会の実施」であった。これを受け、小中学校いずれの教員、そして子どもたちが活用することのできる民謡の基礎的・基本的内容、そして民謡の特徴である伝播と変容を体系的に理解することができるデジタル教材を制作した。デジタル教材は、音声の情報のみならず、演唱者の姿や地域の風洞や文化を収録した映像と、詞章や音楽的な特徴をシンクロさせた。また、これらのコンテンツをソフトウェア「フラッシュ」で作動することができるようにした。

図2 デジタル教材 の一部分

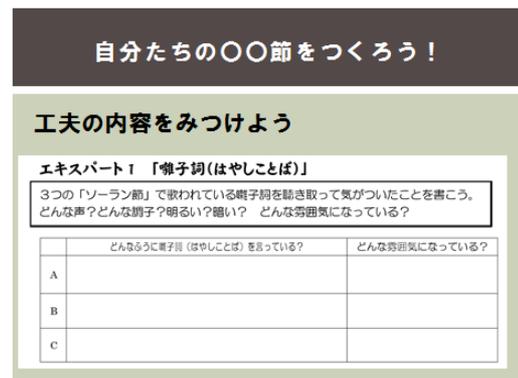


地域のコンテンツに入れ替え可能な PPT 教材

(4)で作成したコアカリキュラムの実施にあたり、変容をキーワードに教師用及び学習者用のデジタル教材を制作した。教師用のデジタル教材の制作にあたっては、教員がそれぞれの地域のコンテンツに入れ替えができるように PPT を活用した。学習者用のデジタル教材の作成にあたっては、タブレットを活用し、学習者自身による主体的な学習が可能な教材を作成した。

上記のデジタル教材については、検証授業をおこない、研修会等で配布をおこなっている。

図3 デジタル教材 の一部分



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

城佳世「民謡を知らない若者たち」『初等教育資料6』文部科学省92-95,2017(査読無し)

城佳世「日本民謡の認知と音楽科教育の関連性」『九州女子大学紀要53(2)』43-59,2017(査読有り)

城佳世「音楽科教育における日本民謡教材の変遷 昭和22年から昭和32年を中心に

」『音楽学習研究 12』音楽学習学会,9-18,2016(査読有り)

城佳世「日本民謡学習の現状と課題 全国の小中学校教員へのアンケート調査を通して」『音楽学習研究 11』音楽学習学会,65-76,2015(査読有り)

城佳世「戦後の中学校音楽科における民謡学習の変遷 学習指導要領の分析を通して」『音楽学習研究 10』音楽学習学会,85-96,2014(査読有り)

〔学会発表〕(計4件)

城佳世「地域伝統芸能を教材とした学習指導の一考察 - 民謡を焦点として - 」『音楽学習学会第12回研究発表大会』九州女子大学2016年8月25日

城佳世「日本民謡における学習の変遷と現在の認知度 学生のアンケート調査を通して」『日本音楽教育学会第46回宮崎大会』シーガイアコンベンションセンター2015年10月4日

城佳世「義務教育における日本民謡学習の現状と課題」『音楽学習学会第11回研究発表大会』茨城大学,2015年7月18日

城佳世「郷土の音楽(日本民謡)の学習に関する一提案」『日本音楽教育学会九州例会』福岡教育大学2015年2月28日

〔図書〕(計3件)

金子敦子「『根室女工節』追い求め来根、名古屋芸大の金子教授」釧路新聞2017.4.25

田中健次・小藤隆志「TRADITIONAL JAPANESE MUSIC AT A GLANCE」アカデミアミュージック,2015

島根県音楽教育連盟・藤井浩基他「島根に伝わる伝統音楽」『小学校音楽ワーク島根県版』島根県音楽教育連盟,2015

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

城 佳世 (JO KAYO)
九州女子大学・人間科学部・准教授
研究者番号：40722731

(2) 研究分担者

田中 健次 (TANAKA KENJI)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：10274565

津田 正之 (TSUDA MASAYUKI)
国立教育政策研究所・研究員
研究者番号：10315450

藤井 浩基 (FUJII KOUKI)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号：50322219

金子 敦子 (KANEKO ATSUKO)
名古屋芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号：90224592

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

大久保 賢 (OKUBO KEN)
名古屋芸術大学・音楽学部・非常勤講師